

葉である。

私が山本有三氏を訪ねた際、やはりお吉のことから、どの程度まで史実に忠実であるべきか、またその反面最近のお吉作品としての舟橋聖一氏の「花の生涯」中に出て来る「安政小唄」「お吉お福」「らしやめん記」……といった一連のお吉をあつかった部分などは、史実を無視した所謂舟橋文学的な興味本位も甚だしいものだと思うなどと、二、三例を上げて説明したところ、山本氏も「なるほど、そのあたりは確に一寸疑問だな……」と私の説に同意された。結局は、史実をあまり離れすぎた興味本位の作品と云うものは、読み終えた後の感銘とか、深く印象づけられるといったものがない為に、すぐにその場かぎりでわすれ去られてしまうものとなる。現に戦後の作品としての「唐人お吉」には先きの舟橋氏のもの外に、井上友一郎、今東光各氏らの手になったものがあるが、これらももう既に、先きの田中総一郎とか浜村米蔵とか云う人たちの作品と同様手に入れようと思っても、ほとんど困難な状態といつてよい。これは一体何を意味するか、今さらくどくどこでくり返す必要はなからう。芸術は「あらはれ」なりと云う彼は、蚕が桑の葉を食べてまゆを作り出すのを見て「あの醜い虫が外界から材料をとり入れて、それを全く自分自身のものにしてしまひ、そしてあの美しいまゆをすつかり自分自身

のものとして新しく吐き出してゐる働きには、自分は只管驚嘆せざるを得ない。自分は思ふ、芸術の急所は確にここである」と云っている。つまり、ここに彼が、他の作家と同じ題材、——唐人お吉と云う材料をつかつて一つの作品に仕上げても、他の作家とは一段も二段も違った、むしろ他の作家にはみられないところの勝れたものを書きうるカギがあるのだと云えよう。

註一、例えばお吉が絹のすべすべした西洋寝巻に着かえたり、わずか三日の間にミルクをのむことを覚え、公衆浴場でシャボンを使用しているところを伊佐の殿様が見学に来る……といったあたりを云う。

註二、今東光「新版唐人お吉」（昭和二十四年九月）「面白倶楽部」・井上友一郎「唐人お吉」（同年十二月）「改造文芸」・舟橋聖一「花の生涯」（昭和二十七年七月）「毎日新聞」連載。

### 〔資料〕 「芥川龍之介全集」の逸文

森 本 修

芥川龍之介は、生前「将来に読者を持つてゐる」ことを信ずる反面、一方では「廿年の後、或は五十年の後、或は更に百年の後、私の存在さへ知らない時代が来ると云ふ事を想像」していた。が、死後三十年を経た今日では、なお広範な読者層をもっている。一昨年度であったか、芥川作品集・研究書・資料が陸続として刊行され、「芥川プリム」を現出したことがあったが、爾来その傾向は今日に至るもいさゝかの衰えすらみせていない。

中でも、岩波書店より刊行された全集十九卷（別に案内一巻）——昭和二十九年十一月—三十年八月——は、旧全集に比して新しい資料が多く加えられ、全集として名実共に兼備充実した体裁でもって世に送られたことは大きな収穫であった。旧全集十巻には、作品・書簡を通してかなりの逸文があったことはつとに知られていたが、これら収載洩れとなったものゝ中、芥川の生前・生後を通じて一度活字となつて発表されたもの（たとえば、こゝに紹介しようとするもの）等は、当然今回の全集に収録されると考えられていた。ところが、案に相違して本稿紹介の五篇は収録されぬまゝに、全集は完結してしまつた。

決定版とも云うべき新しい全集に又々逸文となつた本稿五篇は、全集完結後早々に発表すべきであつたにもかゝらず、今日まで筐中に温めていた筆者の怠慢さは、誌上をかりてお詫びせねばならない。こゝに紹介する五篇を彼の作品系譜に新たに加えられることによつて、向後の芥川研究に寄与するところがいさゝかなりともあれば望外の喜びである。

| 作品名        | 掲載誌          | 発行年月    |
|------------|--------------|---------|
| 1 穂夜読書の記   | 国漢 (第三十八号)   | 昭和十二年八月 |
| 2 産屋       | KANE (第四号)   | 大正六年八月  |
| 3 俳句 (四句)  | 鐘が鳴る (第十号)   | 大正七年三月  |
| 4 白柳秀湖氏の印象 | 随筆 (第二卷 第三号) | 昭和二年三月  |
| 5 新今様      | 相聞 (第一卷 第二号) | 昭和四年七月  |

「穂夜読書の記」は、芥川が府立第三中学二年生当時の学級主任

であつた岩垂憲徳氏によつて発表されたもので、同誌巻頭の口絵に原稿が掲載され、「芥川竜之介氏の中学生時代」と題した岩垂氏の回想記の末尾にも全文が再掲されている。漢学者の家に生まれた岩垂氏は、当時「生徒の作文力を養はうと考へ書取を課したり、国漢文の故事や成語などを」教える補充時間を設けたが、同僚の一部や多くの生徒から嫌われ評判も悪かつたこの時間を、芥川は喜んで書いていたと云われる。その或る時間に、岩垂氏が「蘆は秋の古文字である」ことを話されたのを覚えていたらしい芥川は、それからしばらくして、「秋」をわざ／＼「蘆」とあてた作文を書いた。それがこの「蘆夜読書の記」である。

漢語を自在に駆使し、華麗な文体で綴られたこの一文は、「義仲論」等と共に、芥川の中学生時代をみる貴重な資料と云えよう。

### 「蘆夜読書の記」

一しきり静りてありし虫の音の再雨よりも繁く起りぬ  
我三坪の草庵をめぐりて筆を置き書を閉ぢつ 我は獨り  
水の如き孤燈に對して座し居りき 目を上ぐれば一狼の  
月空にあり清光溶々として上天下地を侵し着空千里空  
色淡くして碧霞み秋星影よりも微に空を綴る棕櫚の葉の  
さやさやと月に囁くを聞かずや 静に座してあれば月は  
満庭の樹を照らして「かくれみの」碧玉の扇と映え白萩  
の茂み雪と照れるが上に墨の如き樹影点々として落ちた  
り 初雪の路ふみしだく二の字とや云はむ 身を澄せば

物ありハハリと我前に落つ 驚て見れば梧桐の落葉なり  
けり我空想の幕は破られつ空に雁聲あり かかる夜や霜  
を結ぶと聞く  
二乙 芥川龍之介

「産屋」は、『萩原朔太郎に献ず』の傍題が付されている。朔太郎は、この年二月処女詩集「月に吠える」を刊行、同じく五月芥川の処女創作集「羅生門」が、阿蘭陀書房から刊行された。本文中にみえる作品集は「羅生門」をさすのであろう。文壇登場後一年新進気鋭の作家として、前途を明るく希望と抱負にみたされながらも、未だ幾許の不安を交えた当時の芥川の姿がみられる。

なお同誌には武者小路実篤の「今の批評家」が掲載されている。

### 「産屋」

男は河から蘆を切つて来て、女の為に産屋を葺いた。それから又引きかへして、前の河の岸へ行つた。さうして切りのこした蘆の中に跪いて、天照大神に、母と子との幸ひを祈つた。

日がくれかかると、女は産屋を出て、蘆の中にある男の所へ来た。

さうして「七日目に又来て下さい。その時に子どもを見せませう。」と云つた。

男は一日も早く、生まれた子が見たかつた。が、女の頼

蟲声嗷々又啣々遠く俚歌を歌ふ聲あり我は再び書を開き  
つ書は日本外史足利氏後記上杉氏之巻曰く努力復取能州  
游佐等乞援信長方攻長島不能來九月城陷誅游佐等乃休兵  
二日屬十三夕月色明朗謙信置酒軍中會諸將士」芙蓉  
の花ぼたりと落ちぬ 優なる哉英雄の心事や げにげに  
それもかかる夜なりけむ思ひやる月下猛將傑士の會 正  
座なる熊の皮の敷物に朽葉色の直垂著て白綾の袴豊に小  
鼓うつ武者振り殊に清げなるは問はねども知る全軍の總  
大將上杉弾正大弼輝虎入道不識庵謙信其の人 一座下り  
て萌黄緘の腹巻に白檀磨きの脚当したるは軍師宇佐美駿  
河守定行 つづいて紫すそごの大鎧に澁色の直垂着たる  
赫顔疎髯の大男は北國武士の随一と人に知られし直江山  
城守兼續 半首べを傾けて軍扇片手に身を澄ます狸々緋  
の陣羽織は剛力無双の甘粕近江守にて早獨り陶然として  
色をなす紺糸緘の腹巻に白布の鉢巻したるは之ぞ音に聞  
く上杉方の剛の者鬼小島の彌太郎平

見よや月は晝を欺きて劍戟霜白う能州の山河淡くして煙  
と見ゆめり 仰ぎ見れば一連の悲雁あり 高鳴いて月を  
かすむ げにや之萬里秋風一狼の月 輝虎入道つと立て  
吟ずらく

霜滿軍營秋氣清 數行過雁月三更  
越山并得能州景 遮莫家鄉憶遠征

みは、父らしく素直にうけあつた。

その中に日が暮れた。男は蘆の中につないで置いた丸木舟に乗つて、河下の村へさみしく漕いで歸つた。

しかし村へ帰ると、男は、七日待つのが、身を切られるよりもつらく思はれた。

そこで、頸にかけた七つの曲玉を一日毎に、一つづつとつて行つた。さうしてその數がふへるのを、せめてもの慰めにしようとした。

日は毎日、東から出て、西へはいつた。男の頸にかけた曲玉は、その毎に一つづつ減つて行つた。が、六日目に男はどうとうがまんが出来なくなつた。

その日の夕、蘆の中に丸木舟をつなぐと、男はそつと産屋の近くへ忍んで行つた。

来て見ると、産屋の中はまるで人氣がないやうに、しんとしてゐた。さうして唯屋根に葺いた蘆の穂だけが暖く秋の日のにほひを送つてゐた。

男はそつと戸をあけた。

蘆の葉を敷いた床の上に、ぼんやり動いてゐるやうに見えるのが、子どもであらう。

男は、前よりもそつと産屋の中へ足を入れた。さうして、恐る恐る身をこごめた。

その時である。河の水は、恐しい叫び声の爲に驚いて、

蘆の根をゆすった。

男が叫び聲をあげたのも、無理はない。女の産んだ子どもと云ふのは、七匹の小さな白蛇であった。……

この頃自分は、この神話の中の男のやうな心もちで、自分の作品集を眺めてゐるのである。

芥川は数多くの余技をもっていた。中でも俳句は「余技は発句の外には何も無い」と云う程の自信のもちかたで、古句に親しむと共に、我鬼と号して蕉風の流れをくむ句を作り、その数は六〇〇句以上と云われる。

3の「俳句」は、「鐘が鳴る」の「俳句の世界欄」に、江口渙・菊池寛・赤木桁平・久米正雄の句と共に「浅春集」の見出しで掲載されたもので、同誌後記に「浅春集は……芥川君の新婚披露の宴を催した頃の作なのださうです」とある。彼と文字夫人の結婚は、大正七年二月二日だった。

なお、同誌「短歌の世界欄」には、川田順の「旅の日記より」  
春の雪ふみつゝ甲斐へ恋ひ来ぬれ笛吹川の流るる国へ  
他九首が載せられている。

「俳句」

|              |     |
|--------------|-----|
| 庖丁の餘寒曇りや葦を切る | 龍之介 |
| 鶯や軒に干したる蒸がれひ | 同   |
| 鶯に菓たか／＼と屋根修覆 | 同   |
| 三門に鶯の夜鳴く臙かな  | 同   |

イデエを沢山持つてゐます。僕は興味のあるのはその点です。僕は少時白柳氏の小品を愛讀しただけに、世間がその点に今日よりも敬愛を持ってば善いと思つてゐます。右御返事まで。

「新今様」は、吉井勇・柳原白蓮等を社友とする「相聞」に發表されたもので、後記に「遺稿『新今様』は、長崎の渡邊庫輔君が祕蔵してゐたもの」とある。

「新今様」

|             |
|-------------|
| 人を佛とあがむれば   |
| 豆の畑に茨生ひ     |
| 栗の畑に薊生ひ     |
| 赤子は背むしと生るべし |
| 凡夫のめづるみ佛は   |
| 圓光まどかにかけて給ふ |
| おきなめづるみ佛は   |
| 柏の餅をくひ給ふ    |

(付記) 以上、こゝに紹介した五篇は、いずれも立命館大学日本文学研究室所蔵のもので、4、5、を除いて雑誌原型が保存されてゐる。

鶯や仰ぐ火山の朝の雲

江口渙

(他二句)

八代目の死繪艶なり春の宵

菊池寛

(他一句)

鶯や深草は南一里なり

桁平

(他一句)

鶯や妻幼なくて髪容

正雄

(他三句)

(集まるがままに吐きすてたる句、いま記憶に残れるもののみを録しつゝ、もとより宗匠ぶりに選みたるには非ざるなり。詠み捨てたるを拾ひしなれば、作者らとて苦情を云ふべき理もあらじ。)

「白柳秀湖氏の印象」は、同誌連載「現代人物月旦」のアンケートにこたえたもので、「少時からの愛読者」と云う見出しが付されている。白柳秀湖については、他に「白柳秀湖氏」が全集に収められている。

「白柳秀湖氏の印象」

僕は白柳秀湖氏にはお目にかかったことがありません。しかし著書は読んでいます。白柳氏は通俗的であることを以て任じてゐるかも知れません。けれども俗人に通じない